

『筑後川』IN八女―團伊玖磨と八女

童謡『どうさん』やオペラ『夕鶴』などを作曲し、戦後日本を代表する作曲家として知られる團伊玖磨（1924～2011）を記念するコンサートが五月十七日、おりなす八女で開かれます。父祖の地に「九州作品」を五十曲残した團は、人と風土を愛し八女に数多くの作品を残しました。

黒木町素戔鳴神社境内には、随筆家でもあった團のエッセイ碑が建立され、碑前では團の命日に合わせ「だご汁忌」が毎年催されています。今村閑彦作詞、團伊玖磨作曲の『だご汁の歌』や『八女消防の歌』が歌われ、参加者は團の好物だった

だご汁を食して故人を偲びます。これらは、黒木町に住む吉村誠さんと團との交友から生まれました。



『筑後風土記』初演の日 久留米・石橋文化ホール
左から 栗原、團、中野（1989年4月26日）

昭和十九年、東京音楽学校（現・東京芸術大学）在籍のまま、陸軍音楽隊に編入した團は「班長」だった吉村さんとの出会い、戦後の一九六九年に初めて八女を訪れ交友が深まりました。

その前年に合唱組曲『筑後川』（作詞は広川町出身の丸山豊）を久留米で初演指揮し、来演の機会も多くなった團はたびたび八女を訪れ、矢部川を歌った合唱組曲『筑後風土記』（作詞は矢部村出身の栗原一登

リヂストンの石橋幹一郎社長（当時）で、同社に勤務していた私が窓口をつとめた関係で、團との親交が深くなりました。團の没後は生前の思いを継ぎ、ゆかりの地で團の作品を歌い継ぐコンサートを続けていますが「八女の地でもぜひ」とお願いし実現させて頂きました。

『筑後風土記』の作詞に当る栗原を案内したのは椎窓猛さんで、一九八九年に久留米・石橋文化ホールで作曲者自身の指揮で初演されました。全国で歌われるようになった『筑後川』を作曲する時、後援したのがブ



エッセイ碑除幕式の日 黒木町素戔鳴神社境内
左から住吉、團、吉村、中野（1992年4月25日）

ています。（五月十七日まで）（團伊玖磨さんの音楽を楽しむ会代表 中野政則）

團伊玖磨記念『筑後川』IN八女2015

五月十七日（日）一日二回公演（別プログラム）
午後六時 午後一時開演
夕方の部 午後四時開演
入場料一〇〇〇円（当日五〇〇円増）
チケット販売所 おりなす八女 〆094312215332

野鳥ウォッチング ⑤ ブッポウソウ

5月、初夏の頃、日向神ダムには南方からブッポウソウがやってきます。ハトより小さく、ゲツゲツゲツと鳴き、飛ぶとつばさに白い線が目立ちます。

メスのほうが大きく、オスからエサを受け取る光景を見かけます。トンボ等の昆虫を好物としております。

去年は鉄橋に巣をかけ2羽のヒナが生まれ、9月に巣立って行きました。

絶滅が危惧されている鳥でもあります。

矢部村 栗原 浩暢



「コトコト コットン」耳の奥

荒井桂子さん死去の記事が目に入った。写真が出ていなければ、見過ごしたかも知れない二十行にも満たない新聞の記事。

戦争が終わって六年。私は小学三年生。ラジオから聞ける荒井さんの「森の水車」が大好きだった。戦争で生き別れた人の消息を尋ねる「尋ね人の時間」が、毎日放送され、未だ戦争の傷跡の大きい時代であった。

そんな時に、「コトコトコットン」と繰り返す荒井さんの、あののびやかな歌声が、電波に乗って日本の津津浦浦に流れた。

「仕事に励みましょう」日本中の人々が目をキラキラさせて、歌の文句同様、仕事に励んでいたあの時代。

「いつの日か楽しい春がやってくる」で、終わるこの歌は、脇目も振らずに毎日を読んだ懸命に生きていた人々に、夢と希望を届ける応援歌であった。あれから六十五年。「森の水車」を知らない人も多くなった。

「もしもあなたが怠けたり、遊んでいたくなった時」三番の歌詞は、毎日が日曜日の今の私のことを歌っているように思う。

のど自慢出場者で初めてプロの歌手になった荒井さんに、今年になってNHKが出演交渉をした際、五年前、口腔ガンで亡くなっていたことが分かったと、新聞は伝えている。

後日、よみうり時事川柳欄に、荒井さんを偲ぶ、湯町潤さんの作品があった。

「逝きてなおコトコトコットン耳の奥」 夏生

楽しい絵手紙



筑後市西牟田

綿貫 栄子

私が絵手紙に心ひかれたのは、我が家の庭になった枇杷の実をお裾分けした方からのお礼の絵手紙

紙でした。はがき一杯に描かれた美味そうな枇杷と喜びの短かい言葉に感動を覚えてその絵手紙を飾って楽しみました。それで今は原武先生の絵手紙教室に通い、先生のやさしい指導の下に楽しい時間を過ごしています。

絵手紙を習うようになってから、今までなにげなく見過していた名も知らない道端の草花までが気に止まり、いとおしく思うようになりまし。今回は我が家に毎年子育てに来るつばめを描いてみました。先生につばめの絵手紙とは珍しいねと褒められました。先生に褒められるといくつになっても嬉しいものです。これからは互いに褒め合って楽しく笑顔の絶えない絵手紙教室にして、痴呆症の予防のためにも皆さんで頑張ります。

健康万歳 ⑬ 「老」には抗うより受け入れよう

今100歳以上の人口は5万8千人ほど、うち女性が5万人、男性は8千人程で女性が圧倒的に多い。長生きは結構なことだがこれも殆ど8割が寝たきり状態と聞けば手放しでは喜べない。

平均年齢と健康年齢の開きが男性で5～6歳、女性では6～10歳あるが、この間は家人を含め何らかの形で介護が必要となり、今後は如何にして命の「量」よりも充実した「質」の老後を送るかが大きな課題となってくる。

年齢が長じるに従い体の機能は徐々に低下し、血圧の値や検査値が若い者と一様にはいかなくなっていく。物忘れが多くなったり、頭髪が白くなったり、家人の話が聞き難くなったり、ものが見えにくくなったりするのも老化の自然現象で、どちらも余り気に病むことではない。むしろ高齢者が勧められるままに薬を常用しているのが疑問に思えてくる。

薬は生薬を除き全て化学物質で、体内に入ると何らかの化学反応を起こす。薬の飲み合わせで化学反応も変わるし、一人ひとり個人差があることを忘れてはならない。使いようでは新しい病気も作りかねない。特に高齢者では四割以上の薬の服用は考え物で、かかりつけ医によく相談する事が肝腎。服用が原因で何らかの症状でも起れば「具の骨頂」と言うべきだ。

以前は脳卒中と言えば脳出血の頻度が圧倒的に高く、いきなり死亡に繋がったが、今は脳梗塞が逆転し、後で半身麻痺や認知症を残すケースが多くなった。これは血圧降下剤を服用したことも原因の一つだと聞いたことがある。

最近ではアンチエイジングに様々のサプリメントも使われ、数兆円市場と言われている。巨大広告に惑わされて自己判断で服用してはならない。効果の点ではプラセボ効果（飲んでいる安心感）はあるが無駄なものも多いように思う。

アンチエイジングで「老」に抗うことよりナチュラルエイジングで「老」を受け入れた方が上手に歳を重ねていく生き方だと思っている。 林 栄一（医師・八女市立花町）